

【症例ケヴィン】〔男児、年齢：治療開始時8歳6ヶ月〕

於・St.George's Hospital, Dept.of Child Psychiatry, Clare House
Blackshaw Road, London. SW17, ENGLAND

- ・主訴；カンシャク発作。暗闇を怖がる。チックなどの不安症状あり。
- ・家族背景；養父母。ケヴィンを生後6週目に養子として引き取る。同じく養女の妹カレンがいる。
父親は、自動車整備工。母親は、折々にチャイルド・マインダーとして日中
他家の赤ちゃんを自宅で預かって副収入にしている。

■資料その1：ケヴィンの主治医からGP宛の書簡（日付；1977年2月7日）

Dear Dr. Levinson、

Re:ケヴィン H.（年齢・8歳5ヶ月）

拝啓

そちらから以前ご紹介いただきました、この男の子のことはご記憶のことと存じます。彼は、養子として Mr.&Mrs.H. に引き取られました。カンシャクを破裂させることが頻繁になっております。それもどうやら家庭以外、そして学校では万事問題はなく、適応はできておるようなのですが。

「家族面談」を昨年1976年の9月6日に当方で実施致しました。妹のカレンはまいりませんでした。両親共、この男の子について大層心配しているようでありました。特に母親は父親よりもいっそう気を揉んでおります。子どもの問題について、両親はその見解を完全に一致させているもようです。

ケヴィンは、誕生6週目で養子として引き取られました。幼い頃しばらく一人で放って置かれるとよく泣く子どもだったとのこと。それで母親は、彼は一人でいると退屈をしてしまうようだし、それに睡眠は大概の他の子どもと比べてあまり必要なさそうだと徐々に気づいたとのこと。彼が2歳半の折のこと、たまたま両親が或る知人のことを噂していて、妻が入院しているので彼が見舞いに行った話をしているのを耳に挟みました。ケヴィンはすぐさま思い切りカナキリ声を張り上げたとのこと。そしてそれ以降、彼はしばしば真夜中に目覚め、両親の寝室に駆け込んできて、<ぼくのこと、置いてきぼりにしちゃいやだあー>と叫ぶことがあったとのこと。それから後の1年半ほどの間、親のうちどちらかが彼が寝入るまで一緒に側にいてやらないと眠れないという事態にあったようです。

彼が3歳から4歳の間のこと、ご夫婦は或る赤ちゃんの女の子を養子として迎えたいと思い、引き取りました。しかしながら、残念なことに赤ちゃんの母親が心変わりをしたために赤ちゃんは連れ去れてしまったそうです。再びケヴィンはこのことに強く反応し、彼女が連れ去られたときには路上に座り込んで慰めようのないほどに泣き叫んだとのこと。そして、学校では彼の描く絵すべてが真っ黒に塗りつぶされたと報告されております。

この事実が学校から両親にも伝えられ、ケヴィンと話し合いをするようにと助言を受けたようです。彼らはそれについては不承不承だったようですが、ともかくもそうしますと、一応彼は話し合いには反応したということです。このことがあってしばらく経ってからご夫妻はもう一人別の子を養女に迎えました。ケヴィンは幾らか妹に嫉妬するところはありましたものの、それでもやがて一緒に仲良く遊べるようになっていったとのこと。この子どもカレンは、言語面で遅れがあり、現在のところ定期的にスピーチ・セラピストのもとで治療を受けております。彼女についていろいろ両親からうかがいますと、どうやら全般的に遅れがありそうです。それは軽いものではありませんが・・。

ケヴィンの養育は、明らかにこのご両親にとっては一つの試練であり、また喜びでもあったものと思われる。彼は頭のいい子であり、好奇心も旺盛です。冬場には鼻かぜに罹りやすく、それが気管支ぜんそくにも発展することがあったようです。彼は夜の10時前に寝入るということは滅多になく、大体は本を読んだり歌を歌ったりで眠くなる前の時間をベッドで一人過ごしているようです。1年ほど前には日中にお漏らしすることがあったとのことですが、今はそれもなくなっているようです。彼は排便を母親にいちいち促されないと自分ではしようとしません。それをいちいち母親にうるさく促されることは彼にしてみればひどく心証を害することでもありそうです。彼は概して元気な男の子といったふうですが、不安症状ではなからうかと思われる習慣が幾つかあります。たとえば爪を噛むことです。彼の空想生活は極めて活発であり、彼はよく頻繁に怪物を夢に見ると語っております。

カンシャクを起こすのは、欲求不満に至った時はいつでもそのようであります。そうした場合、彼はカナキリ声を張り上げて、思い切り罵詈雑言を浴びせるのです。特に母親に向かって、傷つけることも容赦しないわけです。それでいて彼は絶えず愛してると言われたり、抱きしめてもらうことが必要のようであります。彼にはたくさん遊び友達がいるのですが、他の子どもたちと仲違いすることが結構あるようです。彼の思い通りに彼らが動いてくれないといった場合などには・・。彼は彼らが或る意味自分をいじめるといったふうに思いがちです。学校は全然問題はありませぬ。彼は、明らかに群を抜いて優秀な子どもの一人として認められているもようです。

ケヴィンは、蒼白い、緊張した面持ちの男の子で、ほんの少し猫背であります。彼は時折まばたきをしますし、変なふうにしなめっ面もします。概して彼は言われたことについての返答は適切です。彼の将来の夢はいつか古生物学者になるというものであり、彼は野生の動物たちに熱烈な興味を持っております。

父親の Mr.H.は幾らか不安げなふうにかがわれましたが、自分の生育った家族とはごく親しいようです。母親の Mrs.H.のほうは、どちらかという心配性であれこれ気に病んで取り越し苦労をするタイプであります。どちらも戦時下で罹災しておりまして、母親のほうがどちらかという苦労したということがあったように見受けられます。

彼ら夫婦関係についてちょっと妙なことをうかがいました。結婚してから何年かの間に、Mrs.H.は流産をしております。そしてそれ以後妊娠ができずにいたわけです。不妊の理由についてははっきりしていません。従って、そうした事情から、彼らはケヴィンとカレンを養子にしたわけであります。しかしながら、2年前に、父親のMr.H.が精管切除の手術を受けたということです。それもMrs.H.が妊娠を怖れることを理由に、なのです！

最初の面会后、ケヴィンの面接をもう一度と考えておりましたが、ついすっかり失念してしまい、先月になってようやくケヴィンに会う手筈を整えました。この間、事態は幾らかましになっております。ケヴィンのカンシャクは幾らか減ってきているようですが、全般的に彼の不安げな様子は以前と違いませんし、両親のどちらもが彼については依然として気掛かりを訴えました。わたしの印象としましては、ケヴィンは高い頭脳をもった、そこそこ軽度の神経症レベルの男の子といったところですが、彼の問題は、一般的な気質的な感じやすさ、そしてそれに幼少時の過酷な外傷体験にさらされたことが結び付いているものと見做していかと思われまます。

こうした観点からして、彼には心理療法(サイコセラピー)的援助がお勧めではなかろうかと考えられます。彼ならば大いにそれを活用し得るだけのものが充分備わっていると思われまます。そういうことありますので、われわれの「児童精神科外来」のサイコセラピストに彼を週一回のセッションということで今後継続して見てもらうのはどうかと、目下検討中であります。ではいづれまた。 敬具

Dr. H. L. Calpan
Consultant Psychiatrist

cc: Mr. R. Greenwood
Director of Education
London Borough of Merton.

■資料その2:ケヴィンの治療についてのレポート (日付:1977年9月22日)

ケヴィンについてわたしの目についた最も主要なる特徴というのは、口唇愛的サディズムであります。それは誕生後すぐさまに実母から切り離されたこの哀れな子どもにとって極めて重要な防衛策であったものと考えられます。彼の嵐のような熾烈な身体的ニーズ、それがたぶん無視されたことによって、いっそうのことによって増大して膨張したのでしょう。彼がセッションにおいて提示する資料からうかがわれまますのは、各セッションとセッションとの間の切れ間 break というのが‘赤ちゃんのケヴィン’にとっての授乳の切れ間ということになりますが、それは恰も渡り鳥がその‘渡り’の度に越えなければならない危険極まりない‘隔^{へだ}たり’として見做され、果たして‘渡り’が成功するかどうか、その確率は低いといわねばならないわけですから、彼は何が何でもタフで強靱でなければならないということになります。実際のところ

彼の早期の幼少時から、母親がチャイルドマインダーとして他家の子どもを預かっているといった家庭環境でしたから、彼の防衛的な姿勢はいよいよ強化されたものと思われます。そして口唇愛的破壊的な万能感は、彼の空想において繰り返し頻繁に出没するわけですが、そこではケヴィンは飽くまでも獲物を狙う‘捕食者 predator’ということになります(図例; 1977/04/22、)。もしくは彼



の作画では、車のレースとかフットボールの試合など、そこでは優勝カップが(象徴的には‘母親の良いオッパイ’ということになります)、彼の是が非でも勝者にならなければならない野心を充たすために大いに強調されており、そしてこれらの競い合うゲームにおいて、進行上秩序を維持するところの審判 referee(良き父親像)が見当たりません(図例; 1977/04/15)。それで、むしろ暴力的な野蛮さとか狡賢さが勝利へと導かれるために必要とされるわけであり、またわたしにしても、それは転移上‘良き授乳する母親オッパイ’ということになりますが、彼の怪物的な貪欲さの‘犠牲(いけにえ)’にならないという保証はありません。そうでありますから、ケヴィンが或る日セッションに現れたとき、その着ていたT-シャツに、それは新調したばかりのものでしたが、タイガー(虎)が大口を開けて、牙を剥き出しにしている図を見たときには、当然ながらギョッとしたわけなのです。(無論、逆転移であります。)



さて、その次の治療段階ということになりますが、彼は、ケヴィンの‘母親オッパイ’に対する癡猛な口唇愛的な貪欲さから身を守るべく、その擁護する者としての‘父親ペニス’という考えが浮かんでまいりました。それはまた、母親の‘内側の赤ちゃんたち’をも守ることになりますが。病院は‘St. ジョージ’に因んで名付けられておりますが、その伝説は有名なもの

のです。騎士である聖ジョージがその剣でもって怪獣から姫を救済するといったものであります。どうやらそれにケヴィンは同一化したようであります(図例; 1977/05/06)。捕鯨の狩人は、それがイカを一飲みにとしているまさにその時に槍を鯨めがけて投げつけたのです(図例; 鯨 1977/06/03)、そしてプールでは見張り役のコーチがいて、長い杖を手にしております。それでプールで泳いでいる子どもたちに、何かしら事故が起こりはしないかと警戒の目を怠らないといったことです。



しかしながら、5週間に亘る夏季休暇が近づくにつれ、彼は自分が‘外の子’であること、もうじきわたしの‘家族’から排斥されるということを意識することが甚だしくなりました。このことが彼の中に燃えるような嫉妬心、敵愾心を惹き起こしたのであります。そして彼は躍起になって、わたしの‘家族’を丸ごとすべて全滅せんと企てたわけであり、他国に爆撃を落とすなり砲火を浴びせる戦闘



機とか爆撃機です(図例;戦闘シーン 1977/07/08)。そしてこうした内容においては、彼は「父親ペニス」に対して、特にその‘タフネス toughness’ということに痛く羨望を抱いていることがわかります。例えば、人目を引く豪華なスポーツカーはいかにもその精力を誇っているわけです。そしてその見映えのするさまということですが、それは大蛇の見事な皮模様であります(図例;1977/06/17)。そうしたものが彼にしてみれば自分に欠けているものと思うわけです。それでそうしたものが備わっている父親から何が何でも奪うことに熱中するわけであります。



彼は父親へ向けての羨望的な攻撃がどのような代償を支払うことになるのか承知していたようであり、それは死に値するものなのであります。例えば「蛇の捕獲者 snail-catcher」ですが(図例;1977/06/24)、それは敵対的かつ嫉妬深い父親なわけですが、有毒な銃弾でその大蛇(ケヴィン)を射止め、そしてその皮を剥ぎ、売って金儲けをするわけなのです。またその他にも、学校の若い三人の女性教師がこの夏季休暇の間に結婚するということを話しながら、結婚しているカップルというものに俄然興味を覚えたわけです。それは父親と母親、それに転移上ではわたしとその‘夫’になりますが…。事実、彼はこの夏休みを迎えた一週間前に事故に遭います。彼は自転車に乗っていて、友人と追いかけていて、その子が彼に石を投げたので、一目散に逃げようとして近くにあったバイクにぶつかったのです。バイクはその後ろの箇所凹んだ傷跡が残りましたし、彼の自転車はそのハンドルが歪んで曲がってしまったということになります。そしてこのことは、‘両親の性交’に向けての嫉妬めいた敵愾心、そして侵入的な攻撃の企てといったふうに思われます。それが、彼になかにいっそうの「去勢不安」を惹き起こすことになりました。そのことから、彼の内なる破壊欲、それがゆえに対象に及ぼすことになった損傷にまつわる罪悪感などもいづらか意識されてまいります。



「対象の安寧」のためには、彼は自らの万能感を幾らか断念せざるを得ないといった必要性に至ったもようです。その万能感こそが彼が自分の生存のためには絶対的に必要不可欠と考えていたものでありましたが…。例えば、野生のウサギは、地面に穴を掘る。だからそれは庭では飼えない。だから飼い馴らされなければいけないといったことです。そういうわけにして、彼にとって彼自身をどのように‘飼い馴らす’か、それがこのセッションのお休みの間の大きな課題であったわけです。

休暇からセッションに戻った後、ケヴィンは‘男性的な能力 masculine potency’を獲得するといった新しい野心が現れております。父親(そして伯父さん)といった良き助っ人を得て、彼らに対して張り合う気分というのは空想上においてまだまだ潜在していたとはいえ、男性的な性器的有能性を伸ばすためといったことに、彼らの技量とかコントロール能力といったことを見倣うことにしたようであります。例えば、「管制塔」の彼の絵ですが、それが飛行場において飛行機とたえず連絡を取り合い、非常事態に



おいても正しく誘導するといったことです(図例; 1977/09/16)。これとは対照的に、彼のなかの‘飼い馴らされない赤ちゃんの部分’(口唇愛的貪欲、肛門愛的破壊欲)は他のものへと分裂排除されてしまうといったこともありました。例えば、休暇中のフラットの家具にいた害虫のシバンムシとか、雄鹿の背中に寄生している虫とかであります。彼は妹のカレンが誕生日に人形さん用の乳母車を買ってもらったとき、羨望的な感情を否認して、明らかに侮蔑を示します。そして彼は、<カレンは自転車はもらえないよね。もらえるのは赤ちゃんだけだ she has not got a bike, only babies>と語ったわけですが、彼の言わんとするところは、彼女は女の子だからペニスを持っていないといったことです。でありますから、ケヴィンにとってもはや「女・子ども」に用はないといったところでしょうか。

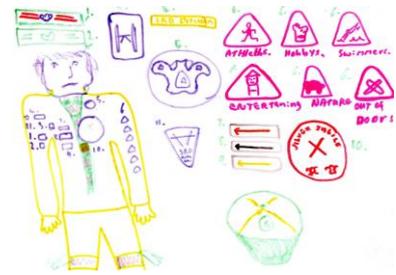
ケヴィンが「原始的な赤ちゃん的自己」を自分自身と関連づけることを拒み、そしてその結果としてそれにいかなる意味でも責任があるといった態度をとることができないのは、彼のパーソナリティの根深い問題の核心といえましょう。それは、この時期においてすらも彼がトイレの躰が完全ではないことを説明するものと思われまふ。しかしながら、彼の古生物学者になるといった野心からもうかがえるように、ケヴィン自身のある部分は記憶されていない感情の‘生きた化石’ということにもなりまふし、その意味でも彼の前意識的な歴史を辿るそこから彼自身についてよりいっそうの自己洞察を得ることが出来る十分な能力はあると期待されまふ。でもそれは、彼の‘怪獸的赤ちゃんの部分’、その噛む歯そして危険な身体的排泄物の結果を巡っての恐怖や罪悪感を徹底操作 work-through するプロセスを通してというふうと考えられます。実の親が赤ちゃんのケヴィンを見離したこと、そしてまたおそらくは彼の養父母の不妊といったことについても、どうやら彼の心の内ではそれらと関連性のあるものと見做されているように思われまふので・・。

Chizuko Yamgami

■資料その3:ケヴィンの治療についてのレポート (日付; 1978年10月2日)

ケヴィンは、外界のあらゆる万象に向けて貪欲に取り込もうと挑みます。それには実に驚くべきものがあります。彼は文字通り自分の眼を使って外界の事物を食い尽くすのであります。事実彼の‘眼’は心理的には‘口’と同等のものといえまふ。この点において、彼が、その幼少時において、睡眠量が極端に少なかったという事実が思い起こされます。彼にとって、目を閉じることはそれだけ彼の心のなかでは食べ物欠乏を意味したということが考えられます。そこで夜に暗闇の中で、彼の飢えた眼(口)が獲物を求めて大きく見開かれていたということです。夜の間中、彼の心のうちでこうして‘捕獲者(predator)’としての所業に夢中になっていたといえまふ。興味深いことに、朝目覚めたときひどく疲れてると彼が言っています。実にそのとおりなのでしょう。彼の幼少時にしばしばカナキリ声を張り上げるとか、その後も彼がカンシャクを起こしたのは、こうした悪夢めいたものに気持ちが囚われているといったことなのではなからうかと考えまふ。すなわち彼自身の口唇愛的破壊性であります。そして「カナキリ声もしくはカンシャク」とは、言うなれば、こうした彼の‘内なる報復的な対象’(彼の餌食となったもの)によって惹き起こされた痛苦を「吐き出すこと」なのだと言えなくもありません。

彼の生存に向けての飽くなき意欲には実に驚かされます。何が何でも生き抜いてみせるといったことですが・・。彼は、こうした弱肉強食の仮借なき世界に於いて断固闘い続けなくてはならないと感じているようであります。そして彼の内なる痛苦と恐怖をどうにか克服するためには、いかなる戦略そして防御策を駆使することを諦めません。この点で、彼の所属するカブ(the cubs/ボーイスカウトの年少隊)での規律やら序列・階級、すなわち組織の秩序というものを彼がとても重要視することが納得されます。学校でもそうですが・・。彼がいかに野心的であるかということになりますが、成功の証(バッジとか証明書など)を手にすることに奮闘するのであります(図例; 1978/04/28)。



だが、「権威」というものについては常にアンバランスであります。楯突くかあるいは従順であるか、それは飽くまでも彼自らの権利が守られるか、侵害されないかどうか、それ次第ということになります。例えば子どもなのだから、赤ちゃん同様に車の後部座席に座るといったことはなんでもないのである。彼の‘所有権’(<ぼくのもの！>)が踏みにじられるのは断じて許しがたいことです。折悪しくたまたま彼のセッションの予定されていた日が病院側から臨時に休日として指定されたことをきっかけに彼の心のうちに謀反がむらむらと萌えました。事実として代わりの曜日にセッションが与えられると分かっても憤懣やるかたない思いは消えません。彼は二つの顔をもった「人食い鬼 ogre の絵」を描きます。次々と手当たり次第に人を捕獲してはポケットに突っ込むやら足で人を踏んづけるやら・・。ポケットのなかの人が助けて！と叫んでおります(図例; 1978/05/05)。(この人食い鬼は「悪しき結合両親像」の例になろうかと思われます。)それはまさに彼自身の貪欲さやら羨望など投影同一化の‘ごった煮’なのであります。かくして敢えて彼らに「子殺し infanticide」をさせているわけです！そんなふうに対抗意識を剥き出しにした次のセッションで彼は、なんと趣きのがらっと変わった「自動車レースのサーキットの絵」を描きます(図例; 1978/05/12)。そこには、車がカーブでスリップ事故が起こらないように警告の旗を手にする人もおります。バリアーに突っ込み、それを越えて真っ逆さまに転倒することが恐れられているわけです。当然ながら出場停止で「埒外の人」になることは耐えられません。飽くまでも彼はレースに留まっていたいわけなのであります。ドライバーの傍らの助手席にはカーブに差し掛かると注意を促すべく地図を読む人も座っております！(「良き結合両親像」になりましょ



1978/05/05)。(この人食い鬼は「悪しき結合両親像」の例になろうかと思われます。)それはまさに彼自身の貪欲さやら羨望など投影同一化の‘ごった煮’なのであります。かくして敢えて彼らに「子殺し infanticide」をさせているわけです！そんなふうに対抗意識を剥き出しにした次のセッションで彼は、なんと趣きのがらっと変わった「自動車レースのサーキットの絵」を描きます(図例; 1978/05/12)。



そこには、車がカーブでスリップ事故が起こらないように警告の旗を手にする人もおります。バリアーに突っ込み、それを越えて真っ逆さまに転倒することが恐れられているわけです。当然ながら出場停止で「埒外の人」になることは耐えられません。飽くまでも彼はレースに留まっていたいわけなのであります。ドライバーの傍らの助手席にはカーブに差し掛かると注意を促すべく地図を読む人も座っております！(「良き結合両親像」になりましょ

1978/05/12)。

う。)こうして、あれこれ衝突事故を回避せんとする手立ては充分のようです。取り敢えず秩序は回復されたかのようでありました。どうやらケヴィンはとことんアナーキストにはなれなかったようです！

ケヴィンがわたしとの週一回のセッションをどのように使うかと言えば、その印象は、‘捕獲者’の親鳥が射止めた獲物を彼らの巣のなかの雛のもとに戻って与えるように、セッションの間に起こったありとあらゆることをそのままにわたしのもとに持ち込んでまいります。言うなれば彼こそがわたしの‘養育者’のつもりなのです！でもそれも、まるで彼がかつて学校で便意を催すことがあってもトイレに行けず、家に帰ってから母親に促されてトイレに駆け込むといったことがあったのを想起させられます。どうやらその‘経験の咀嚼消化能力’が問題のようです。そこには彼がどう思ったかとかどう考えたかといった彼自身の‘情緒的な意味づけ’を全然伴いません。ただ必死であれもこれもと抱え込むだけのようです。従ってここに、‘雛’である彼にとって、経験として与えられたものが食べられるもしくは消化されるためにはひとまず‘親鳥の口’（わたしの解釈！）が必要とされるようでありました。実にこれこそが彼のセラピーの眼目でもありましょ。親が午睡などで眼を閉じておると、よく彼が怯えて、＜ママ、目を開けて！＞と叫んだといったことがここで想起されます。母親という養い手の眼、耳、口といったものなしには、彼は自分を取り巻く世界を情緒的に意味づけることは出来ないのであります。それらは、彼がその味気ない・せちがらい‘白黒（もしくは灰色）の世界’から抜け出し、心がさまざまに意味という彩り（カラー）を持つほどに成長するためには、取り入れられることが是非とも肝要です。そうした援助がわたしのセラピストとしての役割でもあると考えられます。すなわちここに、ケヴィンの経験を咀嚼消化する能力、そしてコンテインメント（抱える能力）の欠如が指摘されます。こうした心の問題領域に目下彼はセラピーに於いて取り組んでおるところでして、それにはまだまだ時間はかかりそうです。

Chizuko Yamagami

■資料その4:ケヴィンの治療についての総括レポート（日付;1979年9月28日）

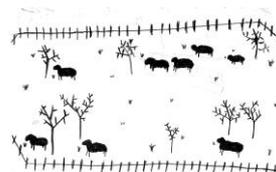
ケヴィンについてわたしが感じるところの最も著しい特徴というのは、彼がおのれのフィーリング（感情）から逃げようとする事です。でありますから、セッションのなかで自分の「内なる自己 his inner-self」に触れて、その思いつくアイデアとか考えを把握し、それでよりいっそうの自覚に向けて、よくよく物事を熟慮するといったといったことが彼に期待されますかどうか、折々に懐疑的になることがあったわけです。

しかしながら、わたしと一緒に彼が自らについて何事かを知らうとするのは、おそらく彼に言わせれば、そんな暇はないといったことでしょう。なぜなら他にもっと重要で緊急の課題があるからです。それは、すなわち彼の母親との攻防戦です。始終つきまとう母親の侵入的なまなざしを回避せんとすることに忙しいのです。実際のところ、こうした彼の傾向を強化させたかもしれないと思われますことに、彼の母親がケヴィンのからだのことでいちいち難癖をつけ、ひどくヤキモキする傾向が挙げられます（彼の猫背とか、前歯がまっすぐではないとか・・・）。そしてどうやらケヴィンはそれへの逆襲としてでしょうか、心の内で女性の「ペニス羨望」というものについてあれこれ思いを廻らせていたようでありまして、そこには幾らか冷

笑的かつ侮蔑的なものが含まれます。そして彼は、得てして母親に対して挑発的になりがちです。例えばゴム製の蛇とか鱈もしくは蜘蛛を、母親が床に入るまえに密かに彼女の枕やらシーツの下に隠しておくといったことをするわけです。そのことが彼女のなかに熾烈な攻撃欲を惹き起こすことを彼は充分わきまえており、それで彼女から彼が反撃されるやら、罰としてそれらオモチャを取り上げられるといったことも充分に承知しているわけであります。言うなれば、面白がって彼女をおちよくっているわけです。明らかに彼は‘愉快犯’なのです！

「去勢不安」が顕著なのは彼の悪夢だけではありません。それでかつては睡眠導入剤を飲むことがあったりしたのですが、彼の性格全般にうかがわれる‘出し惜しみする’性分といったことにも表れているかと思われまます。例えば、成功といったことについて言えば、彼は自分の成功を誰かと分かち合うといったことが困難のようです。それが彼らのなかに羨望 envy を惹き起こすということを恐れているからです。或る時、母親が彼に「Policeコンテスト」で結果はどうだったのかと心配そうに訊いたとか。彼は失敗だったと答えたとか。ところが事実というのは、彼は優勝したのです。彼は人に対して気前よく振舞うといったこともなくはありません。それは他から報復されることを恐れての話です。そしてクリスマスの時期には、特に、彼の配るクリスマスカードやら贈り物が彼らの貪欲さやら要求がましい気持ちを宥めると信じているのです。そして彼らから認められたいとか愛されたいといった、自らの‘飢え渴き’の気持ちには一向に気づこうとしないのであります。どのくらいクラスの他の子どもたちからクリスマスカードが届いたか、彼がその数を数えているときにそうしたことは明らかでありました。また、この点において、恒例の「クリスマス劇」において、彼がその役を「ヨゼフ」ではなく、最初に訪れた王様に敢えてしたのは、彼が何に重きを置いているのか実に明らかです。それは利他主義(altruism)というのでは毛頭ありません。飽くまでも自己愛的探求であります。(つまり、「ヨゼフ」といったマリアの夫役でイエスの父親役なぞにはてんで興味がないというわけです！)

彼のセッションの終了は、復活祭を迎えるずうっと以前に告げられました。彼はその喪失を巡り、抑うつ感に触れ始めたようでありました。それは彼の描いた絵、雪に覆われた原っぱにいる黒い羊たちがそうです。(図例；1979/02/19)。思春期の子どもにありがちな、セッションが終わることは嬉しいと言っただけでしたが、彼の描く絵には、貪欲さの破壊的性質、そ



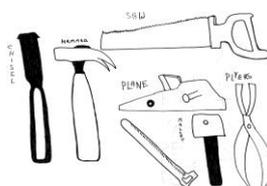
して幾らかシニカルな侮蔑が加味されます。自らのニーズについては勿論否定的となり、また疑いなくもわたしが彼に対して愛情があるかどうかについても疑念を生じたことは確かのようにあります。例えば、



わたしがこうした仕事をしてるのは金のためだけではないのかといったふうに・・・しかしながら、セッション後テーブルの上に残された彼の絵をよくよく見ますと、舞台上でドラマーになっていた彼が使っていたドラムの裏側に「Do'nt cut(切らないで)」という文字を眼にしました(図例；1979/03/23)。セッションがなくなるということで、彼の「自己」なるものの誹謗中傷されたイメージが喚起さ

れたわけです。まるでウンチといったふうに一顧だにされないものとして・・・お蔭で彼の傲慢さやら優越感やらはどっかに吹き飛んでしまいました。彼はもはや学校でクラス担任から重用され、補佐役的に彼の右腕になっているといった、鼻負される成績優秀な子どもということではありません。彼は(ウンチに同一化して)自分の内なる‘落っこたされる’といったフィーリングに直面して葛藤しておりました。1年前にはそれは実に死を意味するような重大事項でしたでしょう。しかしながら、彼はこの「離乳」といった体験をどうにか克服したようであります。それはイエス(キリスト)との同一化をとおしてです！彼の‘物語’で申しますと、息子イエスを奪われ、悲嘆に打ちひしがれているのは母親なるマリアであるというものです。そして復活後、彼は殊勝にも彼女のもとを訪れ、大いに慰めるのであります。<どうぞ泣かないで>と・・・そして天なる神(父親)に加わるために天に昇ってゆくといったものです！詰まりのところ、泣くのはおまえ(Miss Yamagami.)だというわけ！

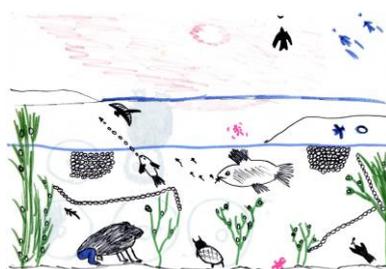
ここでいっそうのこと彼の「父親ペニス」との同一化には拍車が掛かってまいります。わたしが興味を覚えたのは、彼が学校で木工の時間に使う道具類を克明に描いた絵です(図例; 1979/02/02)。それらを眺めながら、彼は内心憧れながら、でも十分にまだ自分はそれらを使えないという一抹の不安もうかがわれました。つまり男子の性器がいずれ大人の男性的な生殖能力 potency を持つということに怖れと憧れを抱いているわけです。そして次のセッションで



は消防車の絵が描かれます。火事で燃え盛る家の中で人々が助けを求めている現場に消防車が駆け付けるといったわけです(図例; 1979/02/09)。ここで幾らか「修復する父親ペニス」が登場した感があります。ケヴィンの技量 competence がそれによって挺入れされることが期待されましょう。



その一方で、彼は学校で自然観察に興味を持ちます。家庭で水槽にオタマジャクシを飼い、日々餌やりし育てながら、その成長過程を記録することをしております。母親もそれに参加しているようすです。「新しいいのち」というものに関心を募らせてまいりましたようで、例えば、彼が描いた自然観察の絵ですが、川の土手には鳥の巣がありました(図例: 1979/03/30)。



ようやくにして、彼は母親の赤ちゃんたちへの「捕食的傾向」を幾らか緩和されていったかのようであります。それこそがかれの治療において最も困難を極めた課題であったわけですが・・・このようにして、彼自らの‘フィーリング’に責任を持つといったことに向けて少しずつ歩み始めたもののようです。

さて、ケヴィンの治療は、4月6日に最終セッションを迎えまして、7月27日に彼とレビューの面接をしております。彼に数か月ぶりに会って、恥じらいを含んだ笑みを浮かべてわたしを見る彼の表情を眺めながら、幾らか彼が‘人間らしく’なっているといった感想を抱きました。性的なめざめもあったのでしよう。

そこにクラスメートとの交流が垣間見られます。その物腰には愛を希求することにおいていづか気弱で恥ずかしげで、取り澄ました印象はごくごく薄れておりました。母親からの報告からしても、わたしとの間の「離乳」はきわめてすんなりと滞りなく通過したようであります。すべてが順当のようです。今やここでもう一つステップ・アップ。「一人前の男」になるべく、まっしぐらといったところでしょう。どうやら頼もしい大きなお父さん Big Daddy



の指導(ガイダンス)が必要だということに気づいてきたようであります(図例;バイク 1979/07/27)。どうやら車のことなど、メカに強い父親とも興味を分かち合うことが大いにあるようです。絵の中の二つのバ



イクのうち、Kawasakiではなくて、小さいほうのHondaが彼のお気に入りなんだとか。そっちのほうがり心地がいいし安全だし、と彼は言います。背景にある森へと向かう小道は生垣で囲われ、木戸が閉められているのが印象的です。なんだか分相応のところに収まりよく収まっている感が致します。それも悪くありません。ここで想起されたのが彼の絵「The Mad Inventor」(図例;1979/03/16)です。それは言うなればマジシャンでもあり、小児万能感に彩られた自画像でありました。ポケットにはいろいろなものが隠されているようです。誰かに不意に襲撃されたらとか、もしものときの転落に備えてとか。彼は疑心暗鬼の塊りでもあり、したがって完全防備体制であります。それでいざとなれば、ベルトには時間を自由に操作できるボタンがあるから、過去に

でも未来にでも自在にいくらでも逃げようがあるだの。バイクの絵は、これと比較しますと、格段に常識的良識的な印象であります。面白味に欠けるともいえませんが、或る意味うまく「飼い馴らされた(すなわち、社会化された?)」彼を思うわけです。

そして彼がこの点において幸運であることを、詰りのところ父親(叔父そして祖父)など彼の周りにいる「男性陣」に列なり、大いに薫陶を得られることを祈るばかりです。そしてケヴィンがいつか一人前としての己自身に自尊心を抱けると同時に、その将来において、やがて小さな弱き者らを保護する「ヨゼフ」のような「父親的かつ夫的な役割」を喜んで甘受できるようになって欲しい。ここでそのためにも、取り敢えず彼が賢明な選択をしたと思いたい。そして、ついには彼が追い求める、真の意味での「生きていることの誇り」をわが手にするだろうことを。

Chizuko Yamagami
(Child Psychotherapist)

■後記

ケヴィンとその親たちのことを振り返るに、‘奇妙な’家族だと思ふ気持ちが拭えない。まったくの見知らぬ他人同士がたまたま神様の気まぐれというかいたずらというか、それも変だが、こうして寄せ集まって家族という因縁に結ばれている。それぞれどう納得できるのかなと思ふ。この頭脳の高い、野心満々のケヴィンという男の子にとってこの現実を受け入れるのは結構しんどいことだろう。しかもケヴィンの妹カレンは軽度の知恵遅れで、しかも黒人の女の子なんだそうな…。彼らは将来どういうきょうだいになってゆくのだろうか。

親たちは普通のワーキングクラスであり、父親は自動車整備工。母親は折々にチャイルドマインダーで他家の子どもを預かる。最初はケヴィンの遊び友達にといったことだったらしいが、それが小遣い稼ぎであることは間違いない。日がな一日他家の赤ちゃんが一人二人居て、夜になるといなくなる。朝になるとまた違う新顔の赤ちゃんがやってくる。こうした家庭環境はどうにも落ち着かない。ケヴィンにしてみたら、なぜ自分がここにいるのかと途方に暮れるだろう。それでいついかなることでここではない別のところへと連れ攫われてしまうか知れやしない。幼いケヴィンの頭が混乱していたのは容易に想像できる。今ここに‘根付く’ことの困難、瞬時にここから‘引き抜かれる’かもしれないことの恐怖。それらはケヴィンにとってあまりにもリアルなのであったろう。

この子どもは生来的に情感が乏しいとは思われない。確かに、わたしから自分の感じていることがらをあれこれ指摘されることにまともに応答することはなかった。どちらかという素知らぬ顔でやり過ごすといったふうだが、でも折々に当惑した面持ちやら時には苦しげだったり、時には笑いを噛み殺すようなおかしさをこらえていたり、それなりに感情の起伏は読み取れた。何よりも彼の作画から、それらわたしの語りかけをきっかけに想像力に溢れた‘物語’を彼が紡いでゆくには眼を瞞った。一緒にいて退屈な子どもでは決してなかった。

だが、どちらかという両親は面白味のない人たちなのだった。謹厳実直といったふうで、こちらに文句を言う隙を与えない。だが話していて決してホンネのところ聞かれないといった印象なのだ。ユーモアのセンスもない。窮屈なのだ。特に子ども好きとも思えない。わたしが彼らに会って、なぜ彼らが子どもを養子に、それも二人も、といったことがすんなりと胸に響かなかった。

この母親が、幼少時に実の弟と犬猿の仲で、しょっちゅう争いがあったことを「親面談」でうかがったときには、ああ、なるほどと思った。特に性的なことにまつわる、男性コンプレックスやら敵対心やら、結構ややこしいご婦人なのである。幼少期のそれがそのまま今や時を経て、ケヴィンとの間でアクティングアウトされている！結構万事小うるさいから、つまらないことで口論となる。であれば、ケヴィンとのことが実に腑に落ちる。この母親はケヴィンに対して、妙なところで‘不感症’、妙なところで‘過干渉’といった具合で、なかなか面倒臭いのである。そうした彼女との攻防戦は実に神経戦だから、ケヴィンにとって心休まることはなかったろう。子育ては‘調教’ではないということがこの母親には一番会得されないうところ

であったようだ。自分のコントロール下に置くことに躍起になるだけで…。いい子なのかどうか、それだけがさも大事と言わんばかりで…。

父親はごく普通。子どもの養育については妻の領分とわきまえて、口出しはしない。チャイルドマイナーの副収入は家計にはそれなりに有り難いわけだから、反対する理由もない。妻との協調性は悪くない。一事が万事、妻に従っている印象がある。それだって悪くない。

この家族間にあるチグハグな感じは、わたしがケヴィンとの治療を終える頃には少しずつ違ってきていた。彼は11歳になろうとしていたわけで。彼の成長につきあってゆけると、彼らが親として自信を深めていることもあつたろう。学校での成績もいいし、ここに至ってケヴィンは彼ら夫婦にとって‘メッケモノ’とも言えた。地域で結構彼らは顔が利くらしい。母親はPTAの役員もしているとやら…。

親の‘目論見’が何であれ、ともかくもケヴィンは彼らを親とし、ここで生き残るしかない^{ほそ}と臍を固めていたようだ。親との^す揃り合わせの日々のなかでそれなりの‘戦略’も心得、彼らの子どもとしてどうにか収まった。近所に住む父方の祖父母に彼が^{なつ}懐いたことも大いに味方しただろう。

結構ケヴィンは好奇心旺盛で‘覗き魔’だから、何一つ親たちについて見逃さない。その真面目さの裏側にある愚かしさやら滑稽味を引き出す。それで彼は‘愉快犯’でもあるからして、時には小憎らしいやら神経に触るやらと親にしてみれば、なかなかこの子どもに付き合うのも面倒であろう。

親は親なりに、子は子なりに、駆け引きをしてゆくもの。それでいつしか相互の間で‘取引’成立ということにもなろう。そして彼らはこれからも水面下で‘駆け引き’を続けてゆくのだろう。ここで十分に地固めができたともいえよう。子どもが大きくなり、それなりの分別が付くなかで親の役割も違ってくる。ケヴィンと一緒に水槽のおたまじゃくしの観察をするなどというのも、今や母親にとって悪くなかろう。

治療の終わりを迎えて、母親と面談した折に、彼女がわたしにとっても感謝していると礼を述べ、こう語った。<He's got a mind of his own now. He's a character(自分というものがわきまえられてきましたわね。彼はそこそこ個性がありますわ)…。>。これは親として上出来である！こうした褒め言葉は時に聞かなくもないけれども。mind(こころ)とか character(個性)とかが彼女の口から出てくるのは想定外だったから、わたしは安堵した。まずまず優等生の母親といったところ。偉い！そしてこれだけの苦勞を背負い込む彼女の胸の内をちょっと覗いてみたい気にもなった。

ケヴィンが安定し、学業もめざましいということがわたしとの治療のお蔭ということを幾らか理解できたようだが、それだってそもそも自分たちの判断でこちらにお願いしたことであるわけで、自分たちのお手柄であることは否定しない。つまりは全般的に今やケヴィンの成長の事実を、自分たちの躰が、子育てが決して間違っていなかったという自信の裏づけになっていた。それも悪くない。

いずれにしても、彼らが「ソーシャル・サービス」を利用することを万事心得ているといったことが注目される。まず地元の家庭医に訴え、そこからの紹介でわが病院に繋がった。彼ら両親が自分たちだけでケヴィンのことを何とかできるとは思わなかったことはむしろ賢明であったろう。その後、病院ではケヴィンのセラピーと並行して、母親もPSWのMrs. Priorとの面談が継続されていた。彼が今生きられていることにどれほどの人が関与したかを思ってみるとき、その運の強さには驚嘆するばかりなのだ。彼との2年ばかりの治療を終えてみて、このように多くの人達が連携プレイをしながら、この「黒い子羊」のケヴィンを囲い込み、育てたことを思えば、彼の運の強さとともに、英国ソーシャルワーク及び医療システムの底力を思う。彼の国にはいい意味で子どもを私物化しない、社会全体の中で育ててゆこうという風潮がある。いつか彼が自立して社会の有能な一員になり、何らかの社会貢献ができることが期待されている。子どもはわれわれの次の時代を担うもの。だから「親であること」は決して自分たち当事者だけの務めではない。親たちが孤立させられないということが社会的な共通認識になっている。「親なるもの」が社会化されてゆく道筋があるということ、そこにイギリスの底力を思う。当然ながら、「児童臨床」はそうした理念に挺入れられている。ケヴィンはそのようにして生かされた。それを彼がいつか理解できたらいい。そしてこのように生きるチャンスを与えられた子どもとして、いつか彼が剥き出しの闘争本能のみではなく、「同胞愛」を拠り所にして身近な近隣のなかに根を張ってゆくことを祈りたい。

わたしとしては、ケヴィンがかつて暗闇を怖がったように、理由もわからず、言葉にならないところで心の内に鬱積している怯えやら疑心暗鬼が尚も気掛かりだ。まだまだ窮屈なところがある。それら彼の内なる感情について真実を知ろうとすることは当面棚上げされるしかないのだろう。ただ現実には学校やらボーイスカウト活動などさまざまな経験から、他者が単なる脅かしではないこと、折々に幻滅にも耐えられるようになり、徐々に断念することをも覚えてゆくこと、やがて‘右倣え感覚’^{みぎなら}が募ってゆき、規律が身につく、自分の居場所をわきまえるといったことが期待されるであろう。そんなふうに、まだまだこの子どもも、また親たちもチャンスを貰ってゆくのだろう。そして自分たちが家族していることが幸運なことであり、自分たちの人生はそう悪くなかったと思える日があるだろう。 (2018/02/12 記)